

【調査報告】ラオスにおけるビフォーコロナ／アフターコロナに関する考察

海老澤 圭（早稲田大学大学院文学研究科文化人類学コース博士課程／
早稲田大学文学学術院文化構想学部複合文化論系助手）

はじめに

2019年に発生し、2020年には世界的に感染が拡大した新型コロナウイルスは、海外におけるフィールドワークを主な調査手法とする文化人類学者の研究生活に多大なる衝撃を与えた。筆者は2014年以降、足掛け1年以上に及び、東南アジア・インドシナ半島唯一の内陸国であるラオス人民民主共和国（以下、ラオス）において食文化に焦点を当てながらフィールドワークを実施してきた。調査で得た知見は、日常的な食事に関する考察 [海老澤 2015]、現代的な食生活の特徴が顕著に見られた飲み屋における食事に関する考察 [海老澤 2019]、そして祝祭時における伝統的な食事に関するエッセイ [海老澤 2021]などにまとめてきた。しかし、2019年11月～12月のフィールドワークを終えて実に2年半以上に渡り、新型コロナウイルスの影響によりラオスを訪れることは適わなかった。

ラオスでは2022年5月にラオス国民、永住者、外国人及び無国籍者に対して全ての国際国境地点が解放されたものの、この時点では日本側は帰国時の隔離政策を継続していたため、渡航は現実的なものではなかった。

しかし、2022年6月ようやく日本政府は海外から日本への入国時の隔離政策を大幅に緩和した。具体的には、日本政府が海外諸国を新型コロナウイルスの危険度で分類し、危険度が最も低い国への入国／からの帰国に関しては、入国は受け入れ側の国が必要とする書類を用意すれば渡航でき、帰国時には陰性を証明する書類が必要ではあったものの、隔離政策が実質的に大幅に緩和された。この緩和政策の結果、日本から諸外国への渡航に不可欠な書類であるパスポート以外に必要な書類は、日本からラオスへの出入国においては3回目ワクチンの接種証明書、ラオスから日本への出入国にはラオスでのPCR検査の陰性証明書のみとなった [在ラオス日本国大使館 2022]。以上のようなラオス及び日本の双方の出入国緩和に伴い、筆者は2022年8月の夏季休暇期間に約1か月のフィールドワークを敢行した。

本稿では今回のフィールドワークの調査内容から、コロナ前後（ビフォーコロナ／アフターコロナ¹⁾）のラオス都市部の在り方と人々の生活の変化に着目しながら、以下のような流れで報告を進めてゆく。第1にラオスという国と、主な調査対象地域である首都・ビエンチャンに関する概況を記述した上で、調査報告としてビエンチャンにおけるアフターコロナの繁華街の変化について詳述する。第2に、筆者がラオスにおける調査を始めた2014年以降、ラポールを築き続けてきたインフォーマントのビフォーコロナの生活の在り方を簡潔に紹介する。最後に、今回の調査の中で、インフォーマントの中でも新型コロナウイルスの拡大によって特に人生を大きく揺るがされた2名について詳述することで、限定的な例ではあるものの、アフターコロナという困難に対峙してきたラオスの人々の生きざまを明らかにする。

1. ラオス概況およびラオスにおけるアフターコロナについて

1-1. 調査地概況

ラオス人民民主共和国

ラオスは国境を中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーに囲まれたインドシナ半島唯一の内陸国である。国土は236,800 km²であり、そのほとんどが岩だらけの山（rugged mountain）で、森林が67.9%を占めている。人口は2020年で7,447,396人であり、東南アジア諸国の中で最も人口密度が低い国でもある [Central Intelligence

Agency 2022]。

上記の情報だけを読むと、ラオスは自然豊かで穏やかな国という印象を受けるかもしれない。実際に、旅行代理店の広告や観光ガイドブックでしばしば強調されるラオスの魅力は、森林、山岳、河川（特にインドシナ半島の国々を越境して流れるメコン川）などの自然環境である。そして、実際にこれらの自然風景はラオス各地で見ることができる。

その一方、首都であるビエンチャンは上記の自然豊かな環境とはいささか異なる様相を呈している。



図1 ラオス全土の略地図²⁾

ラオスの首都・ビエンチャン

ビエンチャンは、3,920 km²の面積に665,000人の人口を擁する、ラオス国内で最も人口密度の高いエリアである。都市中心部は、ホテル・ゲストハウス・レストラン・食堂・屋台・飲み屋・土産屋・企業・スーパーマーケット・コンビニエンスストア・デパート・政府機関などが林立する、国内で随一の商業区域でもある。

早朝および夕方には、他の国の首都あるいは都市部と同じように、道路が車とバイクで混雑する風景が見られる。ラオスでは日常的に用いられる公共交通機関の選択肢が少なく、またバスやトゥクトゥク（3輪タクシー）などその多くが道路を利用するため、必然的に上記のような状況が生じていると考えられる。

しかし、日中は打って変わって静かで安らかな雰囲気に様変わりする。人々は、あるいは学校で勉強をし、あるいは店でものを売り、またあるいは会社でデスクワークを行う。昼食の時間に外食をするラオス人の姿は散見されるものの、日中の昼食時以外の時間帯に歩いている人の大半は外国人観光客である。

夕方以降になると、日中とは対照的に多くの人出で街が賑わい始める。過ごし方は人それぞれであるが、メコン川沿いのナイトマーケットやその周辺のエリアは、公園・屋台・食堂・飲み屋を始めとしたさまざまな施設に、平日・休日を問わず、若年層や家族連れ、また観光客などが溢れかえる。夕方から夜にかけて、また一部の場所では深夜でさえも、お祭りのような状況が日々繰り返されているのはビエンチャン都市部特有の生活様式であると言えよう。

以上の様子は筆者が主なフィールドとするビエンチャン繁華街のビフォーコロナの在り方である。念のために補足をしておくと、繁華街から車で30～40分も走れば田園風景や森林が点在しており、道路上に牛、山羊、鶏の親子などの動物が歩く姿や、川で網縄を用いて漁業に勤しむ人の姿も見受けられる。すなわちビエンチャンは、首都

としての都市的な側面と、前項で書いたような自然豊かな側面が混在したエリアであると言える。



写真1 夜のビエンチャン市内の様子



写真2 ビエンチャン郊外の様子

1-2. アフターコロナのビエンチャンの様子

前項では筆者がフィールドとするラオスの首都・ビエンチャンの概況を記した。本項では、調査報告の一端としてアフターコロナにおけるビエンチャンの様子を描いてゆく。

2022年7月30日の20:30に首都・ビエンチャンに位置するワットイ国際空港に到着した。空港内には以前は軽食屋、カフェ、SIMカードの販売店、両替所、土産屋などが点在していたが、未だ海外からの渡航者数が以前のようではないためか、両替所と土産屋の多くが閉店していた。空港内ではマスクを着用している者が多かったが、宿泊先のアパートが建つ中心部に到着すると、マスクをしている人はほとんど見受けられなかった。

ビエンチャンに到着した翌日、インフォーマントと会う前に日中の市内を散歩していると、ホテル、土産屋、両替所など外国人を主な顧客とする店の数は減少していたものの、町全体の印象としてはビフォーコロナとさほど変わらない光景が広がっていた。

町の変化を感じたのは、その日の夜のことであった。前項で説明したようにビエンチャンでは夜になると多くの人出で賑わうが、その活気が以前よりも増していたのである。具体的には、「センターポイント」と呼ばれる若者で賑わうスポットがあるヘンブン通りが、夜になると所せましと屋台が連なる夜市に変貌していた。さらにその一角には、奥行き30mほどはある屋内型の飲み屋が新設されており、毎晩若者で賑わい満員の様相を呈していた。のみならず、繁華街の各所に飲食・服飾を主に商う屋台が連なる新しい夜市が出来ていた。インフォーマントによると、この周辺の土地・建物の多くは中国人が所有しており、ホテルやレストランなど観光客が主な顧客であった施設の所有者が、その施設の門前や周囲のスペースをテナントのような形で貸しているのではないか、とのことであった。

また、2015年にオープンした大型商業ビル・ビエンチャンセンターの隣に2019年頃にオープンしたマレーシア系小売り大手の巨大百貨店・パークソンにも、非常なる変化が見られた。オープン当初はテナントが入っていない区画がほとんどで、がらんどろという言葉を想起させるような印象であったが、今回のフィールドワークでは1階にカフェ、ファストフード店、高級寝具店、電化製品の小売店、化粧品店など多種多様な店舗が軒を連ねているのみならず、通路では高級外車の展示販売も催されていた。更に、地下1階には巨大なスーパーマーケットとフードコートが開店していた。フードコートでは、ラオス料理のみならず、中国・タイ・ベトナム・日本などアジア各国

の料理が販売されており、昼時になると広々とした店内のほとんどが満席状態となっていた。

本項では、ラオスの首都・ビエンチャンにおけるアフターコロナの現状として、夜市の急増による繁華街エリアの拡大や大型百貨店のテナント増加といった、国内的な商業活動の活発化という現象を紹介した。アフターコロナのラオスでは、当然外国人観光客による消費活動が激減していることを鑑みると、消費者のマジョリティはラオス人であり、これはとりもなおさず、ドメスティックな消費活動とその需要が増加していることを意味すると言えよう。その背景には複雑に絡み合う、マクロ／マイクロな政治的・経済的・文化的な動的ポリティクスが働いているが、それは本稿で仔細に立ち入れるようなトピックでは無いため割愛する。しかし、2021年12月3日に開通した、中国雲南省の昆明駅とビエンチャン南駅を繋ぐ鉄道がラオス国内のアクセシビリティを格段に飛躍させた影響は見落とすことができないだろう。飛行機よりも価格が安く、バスやワゴン車よりも快適である鉄道は、ラオス国内の新



写真3 ヘンブン通りに新設された夜市



写真4 パークソンデパートの外観

たな交通手段として数多くの人に利用されているという [山田 2022]。ドメスティックな移動の簡易化＝国内移動者（旅行者）の増加と、今回確認されたドメスティックな消費活動とその需要の増加との相関関係は、今後注目をする価値のあるトピックかもしれない。

以上のように、アフターコロナのビエンチャンでは、その詳細な理由は明確ではないものの、ドメスティックな商業活動および消費活動の活発化といった現象が顕著に見られた。その一方で、全ての商業活動が活発化したわけではなく、たとえば、国外からの顧客を対象とした旅行・観光に関わる商売は深刻な影響を受けた。この事例に関しては、第3節で2名のインフォーマントに関するアフターコロナの艱難辛苦をつまびらかに描いてゆく。

その前に次節では、筆者の主なインフォーマントのうち2名の人物に関して、ビフォーコロナの情報を簡潔に表すこととする。



写真5 パークソンデパートの内部の様子 その1



写真6 パークソンデパートの内部の様子 その2

2. ビフォーコロナのインフォーマントの状況

A氏

2015年のフィールドワークで出会い、親しい仲となったA氏(20代後半・男性)は、ラオス北部の観光都市・ルアンパバーンの農村部から、私立大学の法学部に進学するためビエンチャンに移り住んだ。卒業後は、生来の生真面やかつ几帳面な性格と、学生時代から勉強を続けていたために堪能な英語の能力を活かして、ルアンパバーン都市部のホテルで勤務を開始した。1年半ほど勤めた後に、同じく都市部に位置するインドシナ半島各国に支店を持つドイツ系の旅行代理店のルアンパバーン支店に転職をした。

農村部に位置する実家は米農家を営んでいる。A氏を含む3人のキョウダイを大学に通わせるために両親が借金を抱えていたことがあり、本人によるとかつては貧しい暮らしを余儀なくされていたという。近年は長男であるA氏と次男・長女がそれぞれラオスの都市部でオフィスワークをしていたり、A氏が実家にて水牛を飼育・販売するビジネスを始めたことから、暮らし向きが良くなってきている。

B氏

2014年のフィールドワークで出会い、その後も継続的に親交を深めているビエンチャン出身のB氏(30代後半・男性)は、飲食店のウェイター、ホテル勤務、小学校の教員を経て、現在はビエンチャンの繁華街にある建物の一部を間借りして、外国人観光客を主な客層とする自転車およびバイクの貸し出し業を営んでいる。主な家族構成は、母(60代・女性)、妻(30代後半・女性)と一人娘(10代前半・女性)であり、数年前からは育児放棄に遭った親戚の子ども(10代前半・女性、10代前半・男性)も養っている。妻はビエンチャン都内の大使館で働いており、筆者は彼女の実家を訪れたことは無いものの、比較的裕福な家庭で育ったことが推測される。

3. アフターコロナにおけるインフォーマントの変化

前節では、ビフォーコロナにおけるインフォーマントの情報を概観した。それぞれに経済状況や家族構成などは異なるものの、各インフォーマントともに安定した収入を得ており、比較的落ち着いた暮らしを送っていた。本節では、生活の在り方が著しく変化したA氏とB氏のアフターコロナの生活の推移について記述する。

A氏

2022年8月に行ったフィールドワークの期間中、A氏を訪ねるために1週間ほどフアパン県に滞在した。A氏とはSNSを通じてアフターコロナの期間も頻繁に連絡を取っていたが、改めて新型コロナウイルス発生後の経緯をインタビューすることができた。

2018年に旅行代理店に転職したA氏は、2020年5月頃までは同社に勤めていた。しかし、新型コロナウイルスの影響で同年3～4月には徐々に国境が閉鎖されてゆき、それ以降(～2022年の6月)、外国人の観光ビザでのラオス入国は実質的に不可能となった。それに伴い観光客が激減した結果、A氏が務めていた旅行代理店のルアンパバーン支店は2020年6月に撤退する運びとなった。A氏は在住していた都市部を離れ、しばらく実家で暮らしていたが、7月頃に国境地帯にあたる北部某所で賭博に関わる仕事の情報を聞きつけ、友人と2人で当地へ赴いた。1週間ほど滞在をするも、途中で賭博の関係者や業務内容の危険性に気がついた彼らは、ほうほうのていで実家へ帰村した。

その後も、ルアンパバーン都市部やビエンチャンで人脈をつてに職を探すも、GDPのうち観光業を含むサービス業が約46%を占めるラオスにおいて[Central Intelligence Agency 2022]新型コロナウイルスの影響は深刻であり、新しい職を探すことは困難を極めたという。しかし2020年9月にA氏はビエンチャンで経営している求人情報会社を介して、ラオス北部に位置するフアパン県でラオス政府に対して土地政策や土地権利に関する規制や法律の発展を支援しているドイツの政府機関の職を獲得した。

A氏は2022年8月までの約2年間同機関で働いていたが、同時期に2020年に撤退した前職の旅行代理店がルアンパバーン都市部で再び開店することになり、以前の上司から「もう一度うちで働いてくれないか」という連絡が来たという。A氏は故郷への思い入れが強く、できればルアンパバーンで働きたいという願望があったため、そのオファーを受け入れることにした。しかし、A氏が現職の上司に退職を宣言したところ、「退職をされると困るので、うちのルアンパバーン支局で働いてくれないか」と請われた。熟考の末に、A氏は旅行代理店への再雇用を断り、同年9月に上記政府機関のルアンパバーン支局へ転勤した。

以上のように、A氏のアフターコロナは職探しと転職、それに伴う移動・移住の繰り返しという波乱に富んだ状況を生み出した。その一方で、アフターコロナの困難においても自らの手で新しい職を探し、最終的には自身の希望通り故郷での仕事を手に入れたA氏の行動力には目を見張るものがある。



写真7 A氏が居住していた長屋の内部の様子 その1



写真8 A氏が居住していた長屋の内部の様子 その2

B氏

2022年7月31日に約2年半ぶりに（後述するように移転をした）B氏の営む店を訪れると、以前と変わらぬどころか、以前に増して忙しく働く様子が見られた。話を聞くと「6月に国境が開いてから、タイからの観光客の数が一気に増えたこともあって、毎日忙しくしてるよ。欧米系の観光客も少しずつ来るようになったしね。あと、うちでバイクを借りたタイ人の客の一人がSNSでうちの店を宣伝してくれてから、ひっきりなしにタイ人がバイクを借りに来るんだ」とのことであった。

その一方で、上述したように、ラオスは2020年から2022年6月まで観光客に対して国境を閉ざしていた。観光客にバイクおよび自転車を貸すことを生業としていたB氏にとって、アフターコロナのラオス社会の変化は彼の経済状況を脅かすものであった。

客足が落ち着いた後、B氏、B氏の妻、近隣で働く男性と昼食のパン・パー（大き目の葉もの野菜に、細かく刻んだショウガ・ナンキョウ・トウガラシ・カオブン（発酵米麺）・焼き魚などを包み、タレにつけて食べるもの）を食べながら、B氏は以前と変わらない明るく朗らかな口調でアフターコロナの経緯を話してくれた。

2020年には、もともと借りていた場所とその周辺を中国人の所有者が開発するというので、別の場所を間借りすることになっていったんだ。それはコロナになる前から決まっていたことだけど、2020年の4月から収入が全くなってしまったから、本当はもっと広い店舗でやりたかったんだけど、仕方なく今の狭い店舗で仕事を再開することにしたんだ。

新しい場所が見つかったのはよかったけど、ラオスで新型コロナウイルスの感染者が初めて見つかったから（筆者注：2020年3月）、ビエンチャンでは何度か外出禁止令が出て、その間は全く商売ができない状態だったよ。禁止令が明けた後は感染者の数もあまり増えなかったから、街中は以前と同じように人が出歩けるようになったけど、外国からの観光客がいないとバイクを借りる人はほとんどいないから、家賃を払ったら赤字になってしまう時期が続いていたんだ。

B氏の店では、バイクを1日（24時間）100,000 kip（約800～1,000円）、自転車を10,000 kip（約80～100円）で貸し出している。火を見るよりも明らかであるように、主な収入源はバイクを貸すことであった。しかし、ビエンチャンはバイクや車を所有している人が多いことから、国内需要は皆無に近かったという。実際、2015年～2019年に断続的に参与観察をしていた間、一部にはラオス国内で働く外国人の顧客がいたものの、この店の顧客のほとんどは外国人観光客であった。

実は、今年の5月には店を畳もうと思っていたんだ。これまで、赤字の分は、お店にあるバイクを幾つか売り払ったり、あるいは妻の収入で賄ってもらっていたけれど、こんなに客が来ないんじゃ、もうやる意味がないと思って。でも、そう思っていた矢先に、6月に国境が開いて、今では毎日忙しくしているよ。この2年間はすごくつらい時期が続いたし、体調を崩して糖尿病にもなってしまったんだけど、観光客が戻ってきてくれたおかげで、また商売ができるようになって本当によかったよ。

以上のように、B氏のアフターコロナの状況は、国境が開いて観光客が戻るまでひたすら耐え忍び、辛抱するという生活を強いられるものであった。自身の自転車・バイク貸し業の拡大を目論んでいたB氏にとって、上述したようなアフターコロナの生活は、経済状況の困窮とは異なる次元にある、自身の夢や目標が叶えがなくなったという苦悩もまたあったのではないかと考えられる。

B氏のようなバイク／自転車貸し業だけでなく、レストラン、ホテル、ゲストハウス、土産屋、両替所、そしてA氏の事例にあるように顕著に影響があらわれた旅行代理店など、観光に携わる実に多くの業種がアフターコロナの苦しみを忍従してきた。その一方で、国境が開いた後に実施した今回のフィールドワークでは、上記のような生業を営む人々が、ようやくビフォーコロナと同じような生活を営めるようになってきた現状を見る事ができた。

おわりに

本調査報告では、アフターコロナにおける昨今のラオスの現状に関して、ビエンチャン市内の状況の変化を描き、またインフォーマントのアフターコロナ（2020年～2022年）を振り返ることで、コロナ禍におけるラオス人の生き方の一側面を明らかにした。

ビエンチャン市内では、海外からの観光客を主な顧客とする店舗を除いて大きな変化はなかったものの、飲食や服飾などを扱う夜市や大型商業施設のテナントが増加しており、国内における商業活動および消費活動の活発化という現象が垣間見えた。

また、アフターコロナにおけるインフォーマントの状況はそれぞれ異なるものであったが、あるいは転職・移動・移住を繰り返すことで生計を立てることに成功し、またあるいはコロナが明けるのをひたすら耐え忍ぶという生活を送っていたことが明らかになった。その一方で、今回の調査ではいずれのインフォーマントもビフォーコロナと同じような状況に回帰し始めていたのが印象的であった。

最後に、2年半以上の期間が空いた今回の調査において、文化人類学を志す者として痛感したのは、ラポール形成の重要性であった。ラポールは文化人類学の入門段階で必ず学習する、信頼関係や相手と心が通い合っている状態を表す概念であり、フィールドワークにおいてはインフォーマントとのラポールの形成が不可欠である。ラポールの形成には長期間に渡るインフォーマントとの関係の継続が必要であるが、冒頭で書いたように筆者は2014年～2019年まで毎年断続的にフィールドワークを続けてゆく中で、多くのインフォーマントとのラポールを形成してきた。そのおかげで、今年度の調査時にインフォーマントと再会をした際にも、以前と変わらない近い距離感や関係性が保たれていた。本調査報告がこのような形で曲りなりにも完成できた背景には、インフォーマントと調査者が互いを尊重し合い、時に家族のような冗談関係を交えながらも築き上げてきたラポールがある。換言すれば、インフォーマントは情報提供者であると同時に、対個人としてお互いを思いやり合う関係をもった同士でもありうる。それゆえに、本稿で取り上げたようなアフターコロナの経緯を話してくれたのかもしれない。

本調査報告では、アフターコロナにおけるラオス都市部の状況やインフォーマントの生活の変化に関してその一端を明らかにした。それと同時に、今回のフィールドワークでは、一度形成されたラポールは長い時間が経過しても変わらない強固なものであることも明らかになった。文化人類学を志す者にとってラポールの形成がいかに重要な概念であるかを経験的に体得できたこともまた、本調査で得られた大きな収穫であったといえよう。

註

- 1) 2020年以降使用されるようになった「ビフォーコロナ」「アフターコロナ」という語は、その新しさゆえに定義が明確ではない。そのため本稿では便宜上、ビフォーコロナを「コロナ禍以前（～2020年初頭）の世界の在り方」、アフターコロナを「コロナ禍以降（2020年初頭～）のパンデミックの影響による以前とは異なる世界の在り方」という意味でそれぞれ使用する。
- 2) The World Fact Book Laos（2022）より引用。

参考文献一覧

海老澤圭

- 2015 「ラオスの首都ビエンチャンにおける日常食に関する記録：都市部における朝食および昼食の一事例」『早稲田大学文学学術院文化人類学年報』10, 55-64.
- 2020 「ラオス人民民主共和国都市部における食文化に関する考察－「総合的な飲み屋」における食事の事例－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』65, 597-620.
- 2021 「【フィールドワーク通信】現代ラオスにおける特別な機会の食事－発酵米麺・肉料理・動物の血－」『早稲田大学文学学術院文化人類学年報』16, 40-44.

在日本ラオス大使館

2022 「6月1日以降の日本の水際措置の見直し」在日本ラオス大使館, https://www.la.emb-japan.go.jp/itpr_ja/11_000001_00966.html, 最終確認日: 2022年12月23日.

山田健一郎

2022 「コロナ禍でも旅客実績予想超え 中国ラオス鉄道の今後を読む(前編)」ジェトロ, <https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2022/b72eb31c33f93e30.html> 最終確認日: 2022年12月26日.

Central Intelligence Agency

2022 ‘The World Fact Book Laos.’ Central Intelligence Agency, <https://www.cia.gov/the-world-factbook/countries/laos/>, 最終確認日: 2022年12月23日.